

令和元年6月21日現在

機関番号：32720

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13539

研究課題名（和文）創造的な知を育成する「師弟関係」の研究 権力関係からケアリング関係への転換

研究課題名（英文）Study of the "Mastery-Apprentice Relationship" as a Creative Educational Model: From a Perspective of the Theory of "Caring"

研究代表者

生田 久美子 (Ikuta, Kumiko)

田園調布学園大学・大学院人間学研究科・教授

研究者番号：80212744

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、教育における「師弟関係」についてケアリング論の観点から検討することを通して、新たな教育のモデルを提示することにあった。本研究では、第一にケアリング論の観点から師弟関係の伝統的な枠組みを再検討し、第二に、日本、米国、フランス等で実施した調査に基づき、卓越性を生み出す教育実践における「師弟関係」にとって「ケアリング」の要素が不可欠である点を明らかにした。最終的に、研究全体の総括を通して、ケアリング関係をベースとする「師弟関係」は、伝統芸能などの特定の領域にとどまるものではなく、「教育」の関係を説明する枠組みそれ自体に新たな視点を提示する可能性を有することを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一に、高度な専門性を有する人材育成を試みるうえで、「ケアリング」関係としての「師弟関係」がもつ効果を検証し、モデル化した点にある。第二に、学術研究、医療、看護、教育、伝統芸能といった多様な領域に共通する「知」の様式が、創造性・汎用性をもつと同時に、その伝承の方途として「ケアリング」関係としての「師弟関係」モデルの有効性を提示した。以上に基づき、本研究の社会的意義は、多様性に基づく知識基盤社会における「高度な専門性を有する人材育成」の方途として、「ケアリング」関係としての「師弟関係」モデルがもつ広範な可能性を提示した点にある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine some features of the "Master-Apprentice Relationship" as a creative educational model from a perspective of the theory of "Caring." Firstly, we tried to analyze the theories of Master-Apprentice Relationships based on the theories of "Caring," and we re-examined the framework of this traditional model in education. Secondly, based on some researches in Japan, the U.S., and France, we made it clear that "Caring" relationship has been essential for constructing the "Master-Apprentice Relationship," which eventually might create excellence in educational practice. Finally, through this analysis based on the theory of "Caring," we presented a possibility to reconstruct the framework of educational relationship, which is not limited to the field of the traditional arts.

研究分野：教育学、教育哲学

キーワード：師弟関係 教育関係 ケアリング論 Negative Capability 創造的な知

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

教育学領域における従来の「師弟関係」についての研究では、当の関係が封建的社会を前提とする上下関係に基づく権力関係として捉えられ、それゆえにそこでの教授・学習は、弟子が師匠の教えを一方的に受容する過程と同一視され、保守的・前近代のかつ新たな創造性の生じない教授・学習形態として批判の対象となってきた。しかしながら、本研究代表者(生田)等の研究グループは、1987年以來、一貫して「わざ」あるいは「実践知」の「学び」に焦点を当て、新しい知の在り方に関する研究を継続して行い、その結果として師匠の模倣を超えた独自の新しい「わざ」の境地に至る事態が生じることを明らかにしてきた(生田久美子、2007(1987)、わざから知る、東京大学出版会)。

上記の学術的研究がもつ背景を踏まえると、「師弟関係」がもつ教育的効果について、伝統的な説明とは異なる観点からの検討が必要であると考えられる。そこで、本研究では、「ケアリング」論の観点から「師弟関係」を分析することを通して、特定分野に限定されない、より包括的な教育モデルを提示する必要性があると想定した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「師弟関係」をネル・ノディングズに代表される「ケアリング」論の見地から分析することによって、新たな創造を伴う「師弟関係」の特質を明らかにすることにある。当の分析を通して、師匠と弟子のいずれか一方が「創始者(原因)」となるような学びではなく、むしろその相互の関係性によってのみ可能となる学び及び「知」の育成過程のメカニズムを提示することを目指した。

本研究の最終的な目的は、教育実践において創造的な「知」の育成をなしうる「師弟関係」の特質を明らかにすることによって、卓越性の高いパフォーマンス(成果)を生み出しうる教育関係モデルを提示することであった。具体的には、以下の3点である。

- (1) 卓越的なパフォーマンス(成果)を生み出す「師弟関係」の実態はどのようなものか
- (2) 「師弟関係」が有する「ケアリング関係」としての特徴はなにか
- (3) 「創造的な知」を生み出す「教育関係」がもつ特徴とメカニズム

3. 研究の方法

本研究の方法は、文献調査、インタビュー調査、調査結果分析及びモデル構築からなる。第一の文献調査は、「師弟関係」についての理論分析、「ケアリング論」に関する先行研究分析、生活知・実践知に関する先行研究調査である。第二のインタビュー調査は、国内外における卓越的なパフォーマンスを生み出している「師弟関係」を対象としたインタビュー調査である。第三の調査結果分析及びモデル構築では、第一、第二の結果を踏まえ、「ケアリング関係」としての「師弟関係」の特徴、当該の「師弟関係」が育成する「知」の体系、「創造的な知」を育成する「教育関係」モデル(実例、特徴、枠組み等)を提示する。

本研究において実施した調査概要は以下のとおりである。

文献調査：

- (1) 「師弟関係」に関する先行研究文献及び資料
： 学術研究、医療、看護、教育、伝統芸能等の「師弟関係」に関する著書および関連論文、資料の収集および分析
- (2) 「ケアリング論」に関する先行研究文献及び資料
： N. ノディングズ、J. R. マーティン、V. レディらを対象とする論文、資料の収集および分析
- (3) 「創造的な知」の育成に関する先行研究文献及び資料
： 状況的、文脈的な「知」の在り方(教育関係論に基づく「知」の育成)
2 人称的参加論に基づく「知」の獲得方法・教授方法

フィールド調査：本研究で実施した主たる調査の概要は以下のとおり。

- (1) 学術研究、医療、看護、教育、伝統芸能等の領域において卓越性を有する「師弟関係」を構築している弟子及び師匠(国内・国外)への主たるインタビュー及びフィールド調査
 - ・ はこだて未来大学における資料収集(2016年5月7日)
 - ・ 瀬戸内における診療所に勤務する看護師と医師との関係性及び医療船の活動を対象とする調査(2016年8月4-5日)
 - ・ 岩手県盛岡市「視覚障がい者のための手のみる博物館」における「創造的な知」に関するフィールド調査(2017年3月1日)
 - ・ 慶應義塾大学名誉教授である教育学者への大学院における師弟関係に関するインタビュー調査(2017年7月9日)
 - ・ 岩手県久慈市野田中学校における創作和太鼓の伝承教育に関する調査(2017年9月26日)
 - ・ アメリカ(ボストン)における「ケアリング」研究者へのインタビュー(2018年4月29日)

(2) 調査項目 (主たるものを抜粋する)

- 師弟関係の基本情報
 - ・ 師弟関係の領域 (学術研究, 医療, 看護, 教育, 伝統芸能, 等)
 - ・ 師弟関係の場所, 期間, 変遷
- 弟子に対する質問
 - ・ 師弟関係の「関係性」における特徴に関する質問
 - ・ 師からの「教える」の特徴 (指導の頻度, 方法, 雰囲気, 等)
 - ・ 自身の「学ぶ」の特徴 (学習の方法, 質問の仕方, 自学とのバランス, 距離感, 等)
 - ・ 現在及び今後の師匠との関係における理想・目標
 - ・ 師弟関係が育んだ「知 (当該領域の卓越性)」に関する質問
- 師匠に対する質問
 - ・ 師弟関係の「関係性」における特徴に関する質問
 - ・ 弟子への「教える」の特徴 (指導の頻度, 方法, 雰囲気, 等)
 - ・ 現在及び今後の弟子との関係における理想・目標
 - ・ 師弟関係が育んだ「知 (当該領域の卓越性)」に関する質問

4. 研究成果

本研究を通して得られた研究成果は以下の通りである。

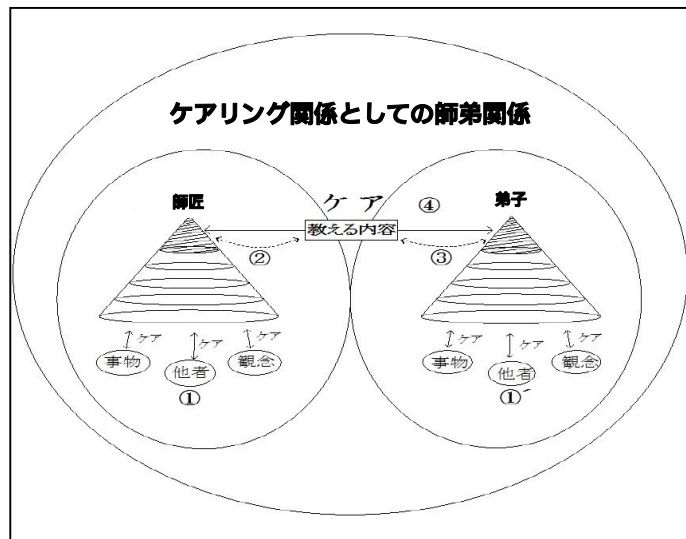
(1) 本研究の第一の成果は, 学術研究, 医療, 看護, 教育, 伝統芸能等の諸分野における「師弟関係」を「ケアリング」関係として捉え, その教育的効果について理論的・体系的に明示した点にある (図1参照)。特に, 「師弟関係」を「ケアリング関係」として捉えることで, そこで育まれる「知」の様式には, 共同的能力観, 状況論, 参加論といった認知科学の諸概念に基づく要素が見られることを明らかにした。

「ケアリング」関係としてとらえる場合の師匠と弟子は, お互いに出会う前に, それぞれの人生の中で既に事物, 他者, 観念とのケアリング関係を持って生きている。それらのケアリング関係を背景にして, 両者はある時点 (図1内の三角錐の斜線部分) で出会う。

ここで特徴的であるのは, 師匠と弟子が, 出会った時点から「教える内容」を媒介として「師弟」という新たな「ケアリング」関係を築いていく点にある。それゆえに, ここに生じるのは師匠から弟子への一方向的な伝達ではなく, 当該の交換を通して師匠と弟子の双方が変容する過程である。その結果として, 弟子が身につける

能力・諸特性の総括 (場合によっては「わざ」と呼ばれる) は, 師匠の単なる「コピー」ではなく, 弟子がもつ既存のケアリング関係との影響関係の中で, 弟子独自のものとなっていく。そこに, 「師弟関係」が育成しうる「創造的な要素」の一端をみることができる。

この「ケアリング」関係としての「師弟関係」においては, 師匠による弟子の受容, 弟子による師匠の受容, 師匠と弟子による対象の受容という3つの特徴があることを明らかにした。また, 当該モデルが「教える」と「学ぶ」に基づく新たな創造性・卓越性を生み出すメカニズムを持ちうること, 師匠が有する「教える」の卓越性として「受容性」がもつ重要性を示しうること可能性をもつことを示した。



【図1 ケアリング論から見る師弟関係】

(2) 本研究の第二の成果は, 「ケアリング」関係としての「師弟関係」によって育まれる「知」の要素として, 当該の「師弟関係」が包摂されるところの共同体があり, 「師弟関係」が育む「知」の卓越性は, 当該の共同体における実践と結びついて機能する点を明らかにした点である。

たとえば, 教育学者への大学院における師弟関係に関するインタビューにおいて, 師匠としての視点から氏は, 大学院における「ゼミ」のなかで醸成される「知」の育成過程の特徴を指摘した。それは, 一つの学問領域における卓越性の基準を共有する過程であると同時に, 文字化やマニュアル化のできない, 「参加」を通してのみなされる熟達の過程である。また, 瀬戸内の診療所における実践においては, 医師と看護師の関係, 看護師と患者の関係という「医療」領域内での関係性が, 当該の診療所を有する島々の島民コミュニティ自体のなかで育まれる点が明らかになった。それは, 「師弟関係」が決して閉じた関係性ではなく, むしろそれを一つの

起点として、それを包括するコミュニティのなかに浸透する影響力を持つ関係性であることを示している。「ケアリング」関係としての「師弟関係」は、師匠と弟子それぞれがもつ個別の「ケアリング」関係の存在を基盤とする。それゆえに、共依存のような閉じた関係となるのではなく、むしろ新たな創造性とより広いコミュニティへの動的な展開という二重の可能性を持つことが明らかとなった。このことは、「当該領域における熟達者」あるいは「省察的实践家」の新たな特徴を描出することを可能にしたといえる。

(3) 本研究の第三の成果は、「ケアリング関係」としての「師弟関係」によって育まれる卓越性が、他の方法論では達成しえない独自性を有する点を示した点にある。高度な専門性を有する「知」の様式は、前述(2)のように、限定された関係性に閉じこもるのではなく、むしろそれを包摂するコミュニティ自体を変容させていく影響力を持ちうる。それゆえにこそ、創造的な卓越性を持ちうる「師弟関係」は、学術研究、医療、看護、教育、伝統芸能といった領域の卓越的な実践的専門家を養成するための高等教育の方法論の一要素としての意義を持ちうるということが明らかとなった。当該の成果を踏まえ、グローバル化や多様化、そして知識基盤型として指摘される社会の中での「高度な専門性を有する人材育成」の方途として本研究をさらに進める必要性が明らかとなった。

特に、本研究の後半において注目した Negative Capability 概念は、創造的な「知」を醸成する上での基本的な状態の説明として、また、師匠が弟子を受容する、また弟子が師匠を受容する際の一つの特徴的な要素として精査を要することを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

1. 尾崎博美, 2016年, 「教師」の位置づけからみるプロジェクト概念 カリキュラム開発と教員養成の交差」『近代教育フォーラム』, pp.31-38, 教育思想史学会。
2. 生田久美子, 2017年, 「感覚を通しての「知」の形成 アンテロス美術館(ポローニャ市)における「触る絵」の事例から」『前川財団「未来教育シンポジウム」講演集』(1), pp.23-28, 前川財団。
3. 尾崎博美, 2017年, 「アンテロス美術館における「触る絵」の教育実践について」『前川財団「未来教育シンポジウム」講演集』(1), pp.29-35, 前川財団。
4. 生田久美子, 2017年, 「わざ言語」という問い(特集:実践知の学びを再考する“わざ言語”)」『看護教育』58(6), pp.412-418, 医学書院。
5. 生田久美子, 2018年, 「わざ言語」という思想: わざの伝承を支えるもの」『日本助産学会誌』31(3), p.249, 日本助産学会。
6. 尾崎博美, 2017年, 「教師と学生の「協働の学び」の可能性 「知」へのアクセスを再構築する大学の「授業」」『大学時報』66(374), pp.88-91。

〔学会発表〕(計7件)

1. 尾崎博美, 「発達を問う知的視線としてのケアリング論 二人称的实践と三人称的理論を架橋するとはどういうことか」, 日本発達心理学会, 2016年5月01日, 於北海道大学。
2. 尾崎博美, 「創造性」ある教員養成を目指す「熟達」理論の構築」, 日本教育心理学会, 2016年10月08日, 於香川大学。
3. 生田久美子, 「感覚を通しての「知」の形成 アンテロス美術館(ポローニャ市)における「触る絵」の事例から」, 田園調布学園大学公開講座, 2017年8月11日, 於田園調布学園大学。
4. 生田久美子, 「わざ言語」という思想: 「わざ」の伝承を支えるもの」, 日本助産学会, 2018年3月3日, 於パシフィコ横浜。
5. 生田久美子, 「専門家の「わざ」とは何か 傾向性(disposition)から Negative Capability へ」, 日本認知科学会 冬シンポジウム(招待講演), 2018年12月23日, 於東京大学。
6. 尾崎博美, 「教育モデルとしての「師弟関係」の検討 「ケアリング」論の観点から」, 比較教育学研究の現在 教育思想・制度・カリキュラム(研究会), 2019年2月18日, 於Maison Internationale。
7. 尾崎博美・生田久美子, 「師弟関係」が可能にする創造的な「教える」とは何か 「ケアリング」論の観点から」, 日本教師学学会第20回大会, 2019年3月9日, 於上智大学。

〔図書〕(計3件)

1. 尾崎博美(共著), 2017年『あなたと創る教育心理学』, ナカニシヤ出版, 担当箇所: 第7章「参加による学習 多様な頭れをする「知」の教育を目指して」, pp.85-96, 第13章「ケアリングと共感 自己と世界をつなげる学習とは?」, pp.171-182, 共著者: 羽野ゆつ子, 倉盛美穂子, 梶井芳明 他。
2. 尾崎博美(共著), 2017年『「ことば」と「教育」』, 岩手県立大学高等教育推進センター基盤教育部教職部門『「ことば」と「教育」』編集委員会事務局, 担当箇所: 第4章「二つの主体間に「教育目的」を生起させる「ことば」の可能性」, pp.47-62, 共著者: 畠山大, 熊本

哲也 他。

- 3 . 生田久美子 (共著), 2019 年 『教師のわざを科学する』, 一莖書房, 担当箇所: 第 8 章第 3 節「専門家の「わざ」とは何か 傾向性 (disposition) から Negative Capability へ」, pp.245-255, 共著者: 姫野完治, 生田孝至 他。

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 尾崎博美

ローマ字氏名: OZAKI HIROMI

所属研究機関名: 東洋英和女学院大学

部局名: 人間科学部

職名: 准教授

研究者番号 (8 桁): 10528590

(2) 研究協力者

- ・ 研究協力者氏名: 村井実 (慶應義塾大学名誉教授)

ローマ字氏名: MURAI MINORU

- ・ 研究協力者氏名: Jane Roland Martin (マサチューセッツ大学名誉教授)

- ・ 研究協力者氏名: 佐藤三昭 (創作和太鼓指導者)

ローマ字氏名: SATO MITSUAKI

- ・ 研究協力者氏名: 小澤詠子 (診療所看護師)

ローマ字氏名: OZAWA UTAKO

- ・ 研究協力者氏名: 岩井敏恭 (診療所医師)

ローマ字氏名: IWAI TOSHIYASU

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。